鹿児島国際大学でフィールドワーク等を経験した学生が成長する様子や地域連携事業を紹介します

IUK 産学官地域連携ニューズレター Vol.17

2021（令和3）年11月15日発行

2021年度 垂水市寄附講座

「これからの『働く』を考える」

垂水市寄附講座は今年で 5 年目になる取り組みで、 垂水市の企業家らを講師に招き、今年度は「これからの『働く』を考える」をテーマに 3 回の講義と垂水市におけるフィールドワークを行いました。 今回は本講座の概要と受講生の声を紹介します。

フィールドワーク

6 月 26 日に垂水市の「道の駅たるみずはまびら」と「森の駅たるみず」で行われたフィールドワークには、 18 名の学生が参加しました。「道の駅たるみずはまびら」を視察後、「森の駅たるみず」へ移動し、豊かな緑と花崗岩のコントラストがきれいな渓谷にある施設を見学。その後、 垂水市の尾脇雅弥市長から、 アフターコロナを見据えたぶりやカンパチの販路拡大事業や、 交流人口を増やすための観光拠点の取り組みなどを伺いました。

引き続き行われたグループワークでは、 経営学科の西宏樹准教授がコーディネーターを務め、「美しい渓谷でワーケーション」をテーマに 3 つのグループに分かれ、森の駅の強みや弱み、ワーケーションのメリットやデメリットなどについて議論し、 プレゼンテーションを行いました。

最後に両駅長が「道の駅と森の駅の連携強化に対する意見やオフシーズンの施設の活用など、 新たな気付きをいただいた。 今後の運営に活かしていきたい」などと講評を述べました。

受講生の声

今回のフィールドワークで、 道の駅で提供している海鮮丼を食べ、森の駅で川や森などの自然を感じることで、 垂水市の魅力を知ることができた。 日本でも取り入れる企業が増えているワーケーションについて、 事前に調べたことを基にグループワークを行ったが、 日本の雇用形態である終身雇用では、 労働管理や人事評価が難しく、 垂水に限らず実行することが難しいようだ。しかし、 働く側からすると、 垂水のような場所でおいしい食べ物や自然を味わいながら仕事をすることができれば、 メンタルケアができ、 生産性やパフォーマンスの向上につながると思う。

白川 あかね　 経営学科 2 年　鹿児島高校出身

地域で取れた食材を使った海鮮丼はとてもおいしく、 カンパチが好きになった。 道の駅には果物や野菜などの特産品を販売している売店やキッチンカーなどもあり、 休憩や休日のお出かけ先として訪れたい施設だと感じた。 私の地元にもこのような施設があればもっと地域が活性化されるのではないかと思う。 また、 森の駅では五右衛門風呂や囲炉裏があるコテージ、 きれいな川などが印象に残った。 私の班は森の駅の弱みを洗いだし、 グループワークを行ったが、 道の駅と森の駅の連携強化や温泉の魅力の広報強化などを発表することができた。

宮奥 桃香　 経営学科 2 年　鹿児島高校出身

発行
鹿児島国際大学
産学官地域連携センター
〒891-0197　鹿児島市坂之上8-34-1
TEL 099-263-0686

鹿児島国際大学でフィールドワーク等を経験した学生が成長する様子や地域連携事業を紹介します

IUK 産学官地域連携ニューズレター Vol.17

2021（令和3）年11月15日発行

垂水市寄附講座概要と受講生の声を紹介！

特定非営利活動法人「森人（もりんちゅ）くらぶ」
理事長　酒瀬川　牧　氏
「自然と人が共生できる地域を維持するために」
2021 年 6 月 4 日実施

【概要】垂水市大野地区で地域を教材に、 幅広い世代を対象に行っている体験型の環境教育や農業体験などの取り組みを紹介。「子どもたちが様々な気付きを得られる事業にやりがいを感じる。 人と自然が共生できる地域を維持するために、 地域の資源を活用した事業を展開したい」

人間は常に新しい物や技術、 便利さを求めがちであるが、 コロナ禍を経験し価値観が変わりつつある。 森人くらぶは四季を感じられる自然豊かな垂水市大野地区で、 小・中学生の自然に触れる体験活動や農業の人材育成、 伝統文化の伝承など、 様々な年代の方と関わって地域づくりをサポートしている。 人と自然が共存する持続可能な社会は、 今、 地球全体が目指しており、 この地域に学ぶことは多い。 私も鹿児島の魅力を発信できるような仕事に就きたいと思った。

児玉 みく　児童学科 1 年　松陽高校出身

今回の講義で特に心に残ったことが 3 つある。 1 つ目は「体験することの大切さ」。 環境教育事業の一環で行った体験活動を伺い、 阿久根市出身の私も地引き網漁などを体験し、 地域の理解が深まったと感じている。 2 つ目は「気付くことの大切さ」。 大学での学びは高校までの「答えを求めるために考える」こととは違い、「気付くことで新しい答えを生み出す」こと。 今後もたくさんの気付きを得たい。 3 つ目は「地域創生への積極的な取り組みの大切さ」。 伝統文化や自然環境を守り、 地域のためにできることを考えていきたい。 将来に生かすために、 大学でたくさんのことを学びたい。

佐潟 和津　　国際文化学科 1 年　開陽高校出身

有限会社 新和建設工業
代表取締役　篠原 基郷 氏
「これからの『働く』を考える」
2021 年 6 月 11 日実施

【概要】大手建設会社で経験を積んだ後、 家業を継ぐために垂水市に U ターンした経緯を紹介。 お客様の声から生まれた環境にやさしい消臭剤を開発・販売する新規事業に参入したことに触れ、「世の中は常に変化している。 人との繋がりを大切に様々なことに挑戦してほしい」

篠原さんが若いころに感じていた「田舎には何もない」という思いが私にもあって、県外の大学に行けばよかったと思っていた。しかし、大学入学後、徐々に興味を持って学びたいと思えることが増えてきて、 気持ちと行動を変えてみた。 分からないことや疑問を持ったことは見過ごさず、先生に質問し、本を読んで調べるうちに学ぶ姿勢に変化があったことを、 この講義で気付いた。 建設業でありながら消臭剤の開発・販売に踏み切られたことは、分からないからあきらめるのではなく、 工夫と協力でやってみる姿勢から生まれたのだと思った。 私も大学 4 年間で挑戦したいことに向き合い、 成し遂げる経験を積み重ねていきたい。

秋元　蓮菜　国際文化学科 1 年　指宿高校出身

災害時の土砂や流木の除去、 火山灰の除去なども建設業が携わっていることを知り驚いた。 長い間、 大手建設会社で様々な業務に従事され、地元に戻り家業を継ぐ際は都会とのギャップに悩まれたことと思う。 考え方を転換し、 消臭剤を開発するなど、 地方から全国へ商品を展開したことは苦労も多かったのではないか。 建設会社だから建設業にとらわれるのではなく、 建設の仕事を通して今この地域に何が必要なのか、 自分たちに何ができるのかを考えた結果が今の会社の姿なのだと感じ、 私も視野を広げ、できることを増やしていくことが大切だと改めて思った。

西牟田 乃々望　　児童学科 1 年　加治木高校出身

有限会社 田村水産
常務取締役　田村 洋平 氏
「サラリーマンから水産業へ　そして世界へ！」
2021 年 7 月 9 日実施

【概要】家業である水産業の魅力や可能性に気づき継承した。 錦江湾の豊かな環境を守りながら、 質の高い魚の安定供給に尽力していることや、 北米やアジアでの市場開拓について紹介。「変化の激しい世の中だが、仕事を楽しいと思えて、やりがいのある会社に就職してほしい」

養殖を通して持続可能な社会を実現するために、 餌に配慮したり、 魚が病気にならないように 1 匹ずつワクチンを接種したりするなど、 様々な工夫をしていることを初めて知った。 また、 世界とつながるために 4 つの条件（定時、 定量、 定質、 定額）を満たす努力をして、 海外へ輸出が出来ていることも驚きだった。 今回の講義で養殖や魚に対する考え方が変わった。 AI の技術が発達していくが、 魚を丁寧に育てられるのは人間だけだと思う。 養殖の世界は面白そうだと思うことができた。

弓指 真優　　経営学科 1 年　鹿児島南高校出身

田村さんが海や魚が好きで、楽しく仕事をされている様子が伝わってきた。その魅力に気付けたのは、 福岡で働いた経験や野球をする中で様々な経験があったからだと伺い、 環境を変え、 挑戦や冒険をすることの大切さを学んだ。「仕事をすることで社会の役に立てる。 仕事でしか得られないものがある」という田村さんの言葉が印象的で、 仕事をすることへの興味、意欲を高めることができた。 海も好きなので、 漁業に関わる機会があれば進んで参加したい。

廣瀬　大　　児童学科 1 年　錦江湾高校出身